

## 平成 29 年度 第 2 回学校評議員会 報告

### 1 出席者

(1) 学校評議員 天竜厚生会障がい者支援事業部長  
浜松学院大学 准教授

(2) 本校 校長 教頭 進路指導課長

### 2 日時

平成 29 年 11 月 28 日 (火) 13 : 30 ~ 15 : 00

平成 29 年 12 月 1 日 (金) 13 : 15 ~ 14 : 15

### 3 内容

(1) 校長挨拶

(2) 校内見学 (高等部「産業社会と人間」または「実習報告会」参観)

(3) 意見交換 テーマ「高等部教育あり方と進路指導」

### 4 御意見等

<高等部教育のあり方>

- ・個々それぞれに考えるべき。
- ・最低のルールを育てるようにする。
- ・支援計画において、短期目標・長期目標をしっかりと立てること。目標は「生徒が～したい。」というような生徒主体の目標になっていることがいい。教師サイドの支援目標になっていることが多い。
- ・安定した登校ができない理由は何か。何が原因か徹底的に探ることが大事。教室に入れないのであれば、入れるようにするためにどうしたらよいかを考える。
- ・生徒本位に考える。本人の意思を尊重することとは違う。教室から飛び出した場合、家に帰りたから飛び出したというのは本位ではない。その場にいられないという理由があり、そこを考えるのが本位である。
- ・理解するためには、とにかく話を聞く。次の日も違うことを言うが話を何度でも聞く。話しているうちに落ち着く。そして理解者がいることで安定してくる。  
「自分のことを理解してくれる人がいるから登校する」と生徒が言うような学校であるといい。
- ・理解者になるためには、病気そのものの理解が必要である。精神疾患の人たちは、波があり安定さを求めることができない。これに合わせようとする支援者が疲弊してしまう。どう関わるのがいいか研修する場があるといい。

- ・「ほめてもらうこと」を求めている。具体的にどこがどうだったかをほめてほしい。
- ・ボランティアや体験実習など、**外に出る機会をできるだけ増やす**。外の世界を何回も使いながら自己理解をしていく。例えば、プレッシャーをかけることは自分への挑戦であり、苦しいのは当たり前である。苦しいときにどうするのがいいか何回か経験するうちに対処の仕方を身につけることができる。
- ・中学校卒業時に、本人の問題点から支援を考えるよりも、家庭を含めた福祉とのかかわりを明記した支援計画ができているといい。地域や外部との連携は必須である。高等部入学時にできていると高等部の3年間で連携しやすくなる。教育では十分できないところを福祉や医療が支えてくれる。